

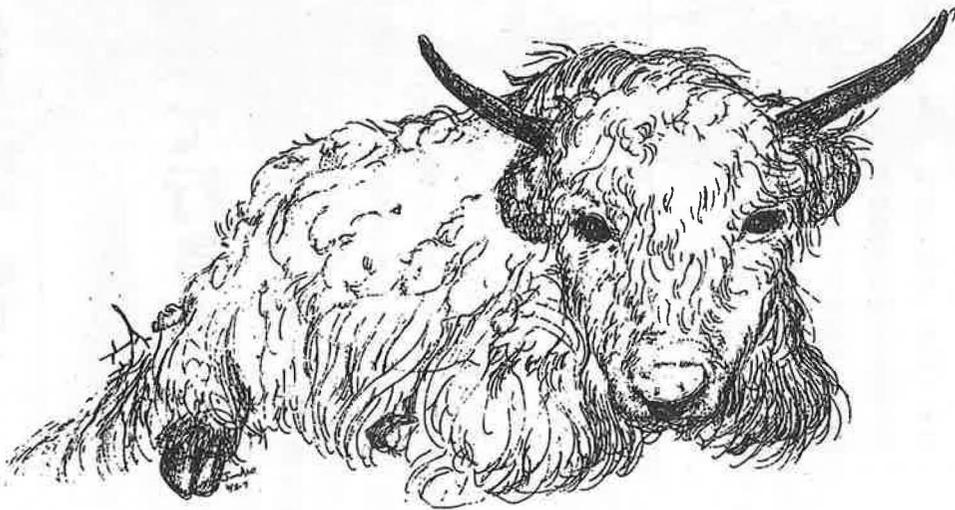
1990年4月10日

みんなで生きる

(1972年4月25日第三種郵便物認可)毎月1回10日発行

ペシャワール会報

No. 23



子ヤクのツォク
パキスタン・フンザ地方
(絵・山田純子)

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

●語り手 シヤワリ・ワリザリフ ●尋き手 沢田 裕子

中村先生のいるかぎり JAMSで一緒にやって行きたい

アツサラマレイコム(こんにはは!)前回の「中村・石松両ドクター・インタビュー」が好評だったという日本からの報告に気を良くし、今回は、中村先生と「ドクター・シヤワリ/インタビュー」を企画しました。いつもは、時間を忘れて、十四歳の時にお父さんを亡くし、男一人で様々な仕事をしながら家計と学資を支えてきた話や、

アフガンの思い出話、現在のアフガン問題への憤怒など、目をむいて、熱く吠えるように話すシヤワリ先生ですが、今日は会報のインタビューとあつてか、ちょっと控えめに、ソフトに語っているような彼でした。中村先生には、お忙しいところ、記録の労を取って頂きました。

中村先生と二人で

・何でも手作りではじめた

——シヤワリ先生、まず一九八六年のJAMSの初めの頃に比べて、現在の状況をどう感じておられますか?

はじめは、ドクター・中村とアフガン人スタッフ四名で始めましたが、今は二〇名を超す組織になりました。開始当時は、薬

も先生と一緒に調査したり、昼食は事務の女性のアミナが作ったりして、何でも手作りでやってみましたね。現在も、大きくはなっても薬局などエキスパートが居ない部署などもあるので、診療能力の向上を図りたいと思っています。少なくとも、セミ・エキスパートの域には達したいですね。

——JAMSのディレクターとして、一番難しいな、なんて思うことはどんなことな

んでしょう?

僕は自分の事をディレクターだなんて思っていないですよ。中村先生なしには、何もできないし。先生に初めて出会ってから、先生がペシヤワールに居る時は、ずっと、ここで、働いていこうと決めただけです。それまでは、ペシヤワールを出て、他の第三国へ行こうと思っていたんです。ただ、アフガン人スタッフの監督はやはり僕がしなければならぬと思っただけで、ディレクターなどと呼ばれるのは気恥ずかしいです。

——管理上気をつかうのは、どういうことですか。例えば?

丁度私が日本に居て日本人の世界がわからなかったように、ここに来る外国人も直ぐにはアフガン人のメンタリテイといいますが、ものの考え方がわからないことがあります。これが一番気をつかう。何でもない態度で接することが、チームのバランスを壊したり、賞讃がスタッフの増長を生むことがある。言葉の壁もある。

しかし、これは長く居れば次第にわかることで、その意味でも協力に来る日本の方々にはなるべく長期に滞在することをすすめ



難民キャンプで診療するドクターシャワリ

ています。協力といっても人の交流ですから、単なる技術の向上で一たす一は二というふうには行きません。

診療能力の向上が

悩みのタネです

——一番苦しかった思い出は？

マリー・アデレイド病院での（らい治療の）研修は、言葉の問題——当時のシャワリ先生の英語は他の外国人スタッフとのコミュニケーションに障害をきたしていたら

しい——などで、始めの三カ月が辛かったです。それと、「らい患者無し」との公営センターの報告を覆すために中村先生と一緒に

行ったバジヨワールのキャンプへのフィールドワーク。らい患者は居るという確信はあったけど、本当に見つかるとしても不安だった。当時、調査が成功しなければ開いたばかりのオフィスは閑鎖される可能性があった。患者を見つけた時には、ほんとに嬉しかったですね。（このあたりの事情については、中村先生の『ペシャワールにて』第6章「難民キャンプへ」を参照下さい。）

——では、患者さんを診療していて、どんな問題を感じましたか？

そうですね。我々に医療のスペシャリストが少ないため、難しい症状の患者が来ても、十分に治療してあげられない事です。それと、薬が高くて続けて投薬できないことなども、限界を感じさせられる時ですね。とにかく、自分の診療能力の向上が悩みのタネです。

——これから、まだ何か始めたいことなどありますか？

できれば母子の問題を扱いたいです。子供の診療をしながら、母親の健康相談にの

ったり、母子の健康教育をうまくやる自信もあるし。どんな風にしたら、家族が助けあって、お金もかからず、世話をしているかというシステムを作りたいです。

それと、今、スタッフの子供達を集めて（学校に行っていない子もいるので）読み書きを教えたり、JAMSのカーペット・ワークシヨップで絨毯作りを遊びながら覚えさせるといった事も考えています。

日本という社会がわからず

心が痛んだことも

——ところで、シャワリ先生は、一九八八年に日本に研修に来られましたよね。その時の日本の印象を聞かせてもらえますか？

んー、質問が大きすぎて説明しにくいけど、平和で、きれいで、良い国。長崎で小学生たちが平和記念像の前で厳かに歌っている光景などを見て、日本の人は「平和」というものの意味を良く理解していると思いました。

——でも、しばらく居ると問題もあったでしょう？ 率直に聞かせてくださいな。

んー。そう言えば、福岡に来て二、三日目に研修先の徳洲会病院から散歩に出た時

のことです。道に迷って、「やきとり屋」に飛び込んだことがあるんです。勧められて飲んだ熱燗のお酒がおいしかったですが(笑)、帰りにやはり道が分からず、そばを歩いている女性に道を尋ねたんですね。片言の英語ながら、親切に病院まで送ってくれ、「実は自分の夫もこの病院で働いている」と言われるのです。そこで病院の私の宿泊している部屋まで案内して、ペシヤールから持ってきたドライフルーツかアフガンの絨毯をお礼に差し上げようかと思っていたんです。そして、部屋に着くと、たまたま、ペシヤール会の福島さんから電話が入り、私は彼とパシウトウ語で話し始めたのです。すると、途端に彼女の表情が変わって、慌ててどこかに行ってしまうたんですね。私は大急ぎで電話を済ませ、ちゃんとお礼を言おうと、後を追ったのですが、彼女の姿はもうありませんでした。何か失礼なことをしたのかと、気になって仕方がないので、後で副院長の木川先生に頼んで私の気持ちを伝えて頂き、誤解が解けたような気がしましたが、日本という社会がわからず、何かスッキリしませんでしたね。

日本にいる外国人は 不幸せな感じてした

——ふーん。そんなこともあったんですね。例えば、お金や物は豊かにあるけれども、日本社会の問題なんかも感じたんじゃないですか。

一つ一つの家庭を見ると、何事もなく平和な社会のようだけど、街に出ると、人々は夜遅くまで外で飲んでる。子供は、家族は一体どうしているんだろう、と思いましたが。若い人達にしても、両親のもとに帰らずこんな遅くまで外出して、とちよつと心配な気がしましたね。

それと、天然資源のようなものとはともかく、お酒や衣類などの加工品で、国内で生産しているような物でも、輸入品をわざわざ高いお金を払って求めていること。

その反面、何もかもが日本語で、ちよつと外国人には不便ですね。

——日本は閉ざされた国だという感じがしました？

その通りです。先ほどの女性の話でも、何故、突然居なくなってしまったのか分からず、いつまでも心が痛みました。日本に

来ている他の外国人も多数見かけましたが、どう溶け込んでいいか分からず、不幸せな感じてしたね。東京で不法入国をしてカーペットを売っているアフガン人にも逢ったりしましたが、難民のようにビクビクしていました。彼の住まいにも行きましたが、一歩中に入ると全くそこはアフガンの家そのもの。戸の外が日本とは思えない位でした。日本国籍を持った韓国の人にも会いました。彼はもう長いこと日本に居るのに、家族をつれて母国に帰りたいがっていました。理由は私には分かりませんが。

仕事場にしても日本の人は皆が家族のように一緒に何かをしていて、私などには、誰が責任者なのか、誰に質問をしていいのかわからない。しかし、役割分担はハッキリしているらしく、自分の職務には極めて忠実で忙しい。とりつくしまがない。

でも、留学や仕事で来ている人達の中では、幸せそうな人も見ました。ペシヤール会の事務局があるアラハウスでも留学生の集まりを見た事がありますが、パキスタン、中国、韓国、アフリカの国々からの学生さん達がそれぞれに忙しそうにしていましたね。



自宅で読書するドクターシャワリ

NGOの大半は… ビジネスのためのビジネス

—話は変わりますが、たくさん
のNGOがペシャワールにありま
すね。それについてどう思
われていますか？

問題はどれだけ有効に活動して
いるかという点でしょう。もし、
ペシャワールでの活動を、ビ
ジネスのためのビジネスと考
えているんだとしたら、そんな
ものはない方がいい。将来、
一部のアフガン人ではなく、
本場に困っている人達、アフ
ガン社会全体の役に立つとい
う活動なら感謝します。でも、
自分達の政治的野心でやって
いるのなら、それは有害です。
ここにいるNGOの

うち、印象では八割方以上が政治
的な目的で入ってきていると言
えます。背景にある政治権力と
の癒着の噂がある団体も数多く
あります。色々な国が、金や物
の力でアフガニスタンを自分達
の思い通りにしようとしている。
それはソ連が既に失敗済みであ
るのに。

一部のアフガン人に大金をばら
まいている組織もあるけど、そ
んなことしたって、彼らの意図
通りに金が使われる訳もないし、
彼らから金を貰うアフガン人達
には自身の迷惑があるわけです
から。いずれ、多くのNGOは閉
鎖されて行くでしょうね。

もし、自分にそれだけのお金があ
ったなら、まず、アフガンの人
々に何が必要かを探り、それを
どうカバーしていくかを考える
のだだけ。アフガニスタンは完
全に破壊されています。何もかも
メチャクチャです。農業も、住
む場所も、全て。

例えば、移動診療所を全地域に配
置して、定期的に診療していくとい
うことなどもできることならや
りたい。

アフガニスタンは近いうちに自分
の足で立つて行かなければなら
ないでしょう。私も、そうなった
ら、アフガン再建に全力

を注ぎます。その時に備えて、今、
ここで良い評価を得ておくことも
大切です。特に、ここは「噂の
社会」だから。パキスタンで人
々の信頼を得ることができれば、
将来、アフガン内部に入っても、
良い仕事ができると思います。

お互いに対等な立場で

つきあいましょ

—では、JAMSの評価は、現在
どうなっていますか？

それは、私の口からは言いにくい。
道行く人を止めて聞いてみると
良いでしょう。ただ、確かに「こ
こはいい病院だと聞いたから」と
言ってくる患者さんは多いです
(国境を越え、JAMSを訪ねて、
アフガンの村からやって来る人
もいる)。でも、こちらの診療能
力不足で、十分な治療がしてあ
げられない時は、とても辛いです
ね。

とにかく、今は、ペシャワール
での診療に努力するだけです。

—それでは、最後に、ペシャワ
ール会の人々に何かメッセージを
お願いします。

サードワールド(第三世界)にあ
る私達に、何か必要なもの、教
えるものがあつたら、

どんどん伝えてほしいです。そして、こちらからも何か皆さんに教えられるものがあるれば、喜んで教えたい。例えば、日本でインド料理のレストランに行っただけで、非常に高かった。アフガン料理だったら、僕は学生時代にレストランをやったこともある位、腕に自信があります。誰か安いアフガンレストランを開きませんか？(笑)

それに、アフガンカーペットなど、言ってくだされれば、私達の文化の紹介をしてあげられます。

——一方通行でなく、互いの交流があるといいですね。シャワリ先生、今日はどうも、有り難うございました。中村先生、何か最後に一言添えて下さい。

主役は現地であつて

我々ではないことを確認

中村 いやいや、大変興味深くお話を伺いました。改めて考えさせられたのは、日本社会がまだまだ鎖国状態から抜け切っていないという感じを、率直に指摘された事です。

これは、私もペシャワールに来て痛切に感ずる事で、海外援助をしているNGO(民

間団体)できえも、この体質が抜け切っていない。「外人」を排除した自分達の合意があつて初めて何かが始まる。現場から見ると大変的外れなことでも、「日本側の合意であるから」などと言つて指示してくる。海外で働くボランティアが出て、美談にして英雄扱いするだけで、現地に即した実質的な支援の態勢を具体的に考えるとところまでは行かない。

結局、現地の事業が日本人を喜ばせるためにあるのか、自分の哲学や美学を満足すればよいのか、首をかしげたくなることもあります。

ペシャワール会は過去の経験をふまえて、シャワリ先生がおっしゃったように、援助の主役は現地であつて我々ではないこと、我々の国内宣伝のために事業があるのではないことを再度確認されたと思います。

それに、我々の援助などと言つてもたかが知れていますから、「豊かになつて金が余つたから気の毒な人へ」というのではなく、徹底して同じアジアの同胞としての目の高さを失わず、「援助」ではなく「協力」を通じて相互の文化的理解を進めるのも我々の大きな「国際化」への貢献ではないかと、

僕は思っています。その意味で現在のペシャワール会の活動は非常に貴重な存在であると改めて思いました。

シャワリ先生、どうもありがとうございます。沢田さんもお忙しい中、マンダナボシ(お疲れ様)。

ゆうこのアフガン教養講座 ①

● ダリ語的表現「目が白くなる」

男性が美しい女性、好みの女性を見て、なにか「下心あり」的な気持ちに陥っている状態。

例文：「サワダさんを見てナジブの目が白くなっている。」

(資料提供：アミナ)

● 古女房にまつわるアフガンの笑い話

「結婚するときはほんとに可愛くて、食べてしまいたいと思つたけど……。あの時ほんとに食べていけばよかった……。」

(資料提供：ドクター・シャワリ)

(*本人いわく、この言葉を今、実感として味わっているとか……。)

主役は我々でなく 現地の人々だということを原点に

中村 哲

力を蓄えるべき時

日本はいかがですか。多忙な折、ペシャワール会のお仕事ご苦労さまです。

最近ではペシャワールの情勢は比較的落ち着いており、ゲリラ勢力の内輪もめと政治テロ以外に大きな事件は起きていません。ただ、アフガニスタン内部は政府軍とゲリラ組織の「内部暫定政権」とのつばぜりあい混戦が続き、現在直ちに我々の活動を内部に延長することは考えていません。散発的にスタッフを送って事態を静観しています。比較的安定すると判断される数年後を期して、こちらも大攻勢に出るべく、今は臥薪嘗胆、力を蓄えるべき時であろうと思っております。

しかし、紛争が今度はカシミールの方に

移り、二月十日の「カシミール・デー」はパキスタン全土が緊迫し、北東部国境ではインドとの間で一触即発の事態が続きました。ソ連南部の各共和国でも、内紛が伝えられています。カラチや南部の各都市では治安が悪くなるばかり、毎日、新聞記事を読むとウンザリしますので、最近では知らぬが仏で仕事を着実に進めることに専念しております。

自転車操業でやっとりま

J A M S (Japan-Afghan Medical Service) もペシャワール・ミッション病院も、

内実は自転車操業で青息吐息、今が最も苦しいときですが、六月頃までには比較的良好な条件で一息つけると判断しています。事務処理や雑務が例年以上にたまっており、



アコラハタックの難民キャンプの子供たち

ペシャワール会事務局の沢田さんが助っ人に来てなければどうなっただろうと、ぞつとしています。

JAMSはユニセフ(国連児童基金)との共同で母子栄養に関する調査を継続、これを通して設備もスタッフの訓練も充実しつつあります。一九九〇年は、この他にマラリア、リーシュマニア、熱性疾患、ハンセン病などについて良い臨床調査を重ね、将来に備えたいと考えています。今の所、日本から見れば極めて貧弱ですが、近い将来熱帯病の良い臨床訓練・研究施設になるでしょう。移動診療部隊も、日本からの補給力が増せばいつでも充実拡張できる態勢



にあります。時間の問題ですが、もう一頑張りです。

サンダル・ワークショップも再開

ペシャワール・ミッシオン病院らいセクターについては、来る三月までには新しい病棟が完成予定、あとは人の問題です。これも今夏帰国後に精力的にかけずり回り、何としても秋までには何とか派遣人員を確保したいと思っています。公営のセンターは、病院としてはほぼ潰れました。ミッシオン病院の役割は大きいです。

サンダル・ワークショップは、大いに期待が持てます。一昨年四月に病院の内紛で一時間閉鎖していましたが、昨年十二月に再開しました。良い職人を確保するのに四苦八苦、スタッフが精力的に調べて「ひきぬぎ」に成功するまで、半年くらい掛けました。なにせペシャワールのようなコミュニティのことですから、大変です。優秀な職人は普通店のオーナーが前貸しをして、低賃金でそこから逃げられぬようにするのですが、救いを求めて来た職人を我々が庇う立場となつてオーナーと一悶着。しかし苦勞の甲斐あつて、

試作品は上出来です！ 今年は一千足を目標に豊作の年になりそうです。

「てんかん」もまずまずだと言えますが、後は根気です。大学の神経カンファレンスもまだ続いています。成人の脳波については皆かなりの所まで来ていますが、小児の脳波についてはまだ弱く、ぼくが全部背負っている状態です。しかし、これも続ければ時間の問題です。ミッシオン病院のてんかん・クリニックもこの一年着実な歩みを示しているようです。

日本人は気が短かすぎます

以上のように大体的見通しはついてきましたが、今夏帰国後いかに補給態勢の立て直しを図るか、考えているところです。ペシャワール会も転機になると思います。事態が正規戦の様相を呈してきて、本格的な実力部隊を組織せざるを得ない段階になっています。小生一人のきりもりでは歯が立たなくなりつつあります。

こちらとしては、現地にとつて良いものを中心に考えてゆくべきで、日本側を喜ばせる事に重点を置くべきではないとさえ思



JAMSの診療に集まった難民の人々

うことがあります。それは、しばしば日本側のイメージや判断と現地事情とが、余りに掛け離れているからです。好意が仇になり、熱意が迷惑になり、現地に負担をかけるという事態がないではありません。日本人は気が短かすぎます。我々の仕事が本場に長期戦に耐え得るように構え、そして主役は我々でなく現地の人々だという出発点に繰り返し立ちかえるべきだと最近つくづく思います。

アフガニスタン難民のための多くの外国NGO（民間団体）が現地の信頼を得ることができないのは、事業が現地のためにあるのではなく、現地が自分の事業のためにあるという倒錯があるからです。

苦楽を共にしながら

この中でペシャワール会の役割は、JAMS本部として、パキスタン北西辺境州とアフガニスタンのらい根絶計画の強力な支え役として、さらに良心的な市民の会を束ねる力として、ペシャワールと日本をつなぐ架け橋として、アジアを身近にする真の国際化の担い手として、ますます重要にな

ってくると思っています。私たちは、過去七年間の蓄積——その中には今考えると笑うべき事も、失敗や苦い思い出もあります——を踏まえ、これまでと変わらさず、こつこつと、苦楽を共にしながらやってゆこうではありませんか。

我々の働きが、人間と人間を隔てる全てのカーテン——それが思想であろうと、主義主張であろうと、宗教的な紛飾であろうと、政治的立場であろうと、それら全てを突き破って輝く時代の灯となるよう祈ります。ではまた。皆様もお元気で。



なかむらてつ

一九四六年福岡市生まれ。福岡高校を経て一九七三年九州大学医学部卒。国

内の病院に勤務したあと、パキスタンでの医療活動を志し、リパールの熱帯医学学校に留学、一九八四年五月、日本キリスト教海外医療協力会（JOCIS）より派遣されてペシャワール・ミッション・ホスピタルに家族を伴って赴任。現在九歳、六歳、三歳の三人の子供がいる。

女性、子供はさらなる困難の中に

アフガニスタン問題は決して終わってはいない。今、やっと復興に向けての長い長い道のりが始まったばかりである。アフガン人の主体的参加なしには復興はありえない。そのための人づくりこそ最も重要なことであると信じている

石松 義 弘

その一歳二カ月の女兒が母親に連れられて診療所に着いた時には、すでに弱々しい生命の終わりを、体全体が示していた。青白くむくんだ顔と四肢。眼球結膜には血のかげさえなく、視線は中空をさまよい、呼吸もかすかにあえぐ程度であった。「なぜもつと早く連れてこなかったのだ」という私の問いに対する母親の答えを聞くうちに、その質問がいかに愚かしく残酷なものであったかと後悔した。

裸足での峠越え

そのパシュトゥン部族の一家は、アフガニスタン北東部クナール州で農業を営んでいた。一九七九年のソ連軍侵攻以来、村はたび重なる爆撃で崩壊しつつあったが、故郷を捨てるにしのびず、また、金もなかったため、破壊された水路を補修しつつ、狭い農地と限られた水でなんとか飢えをしのいできた。しかし去年の二月ごろから、彼らの家からさほど遠くないジャララバードで、ソ連軍がひきあげた後、残されたカブール政府軍とムジャヒディンゲリラとの戦闘が激化すると、わずかに残っていた村人とともに、とうとう逃げざるをえなくなった。険峻を極める国境の岩の峠道を、家財道具のナベ一つとコップ四つを持って、はだして歩いた。まだ残る雪の冷たさや飢えよりも、地雷のほうが恐ろしく、つらかった。その時、この子は六カ月で、ほんの少ししか出ない母乳をしぼり出すようにして与えられた。ほかに二人の子供と夫と妹がいた。

テント暮らし

やっこの思いでパキスタンに着き、アコラハタックというキャンプにもぐり込んだ。ここは十万人以上はいる大きなキャンプで、その中心には井戸もあり、日干しレンガの家もある。しかし、彼女たちは、その周囲にできた新着難民のための粗末なテント暮らしで、遠くまでの水くみは重労働であり、草木も生えにくい半砂漠には、薪も不足していた。不定期に来る配給のナン(小麦のパン)と紅茶と砂糖と食用油だけを食べていた。

夏の間は苦しかった。テントはとても暑く、子供たちもだんだん弱っていった。夫はマラリアにかかってたたび高熱を出した。日中は五〇度にもなる八月ごろ、もうすぐ一歳になるこの子に、血の混じった下痢が始まった。一日に六七回、十日以上続いた。そのころはまだ、噛んで柔らかくしたナンや紅茶を飲んだりできていたが、だんだん弱くなってきた。

バス賃を借り、遠く離れたペシャワールの病院を転々とした。西ドイツ系の診療所でもらった一袋のORS(経口補水塩)を

一辺のお湯に溶かせと言われたが、コップが四つしかなかったし、薪もなかった。近所の人に来て、この子は色が青白い、血が足りないと言って、羊の血を混ぜたお茶を飲ませてくれたが、効かなかった。泣き声が枯れたように弱々しくなつて、眠つてばかりいるので、ナベを売ったお金で、こうしてここにやって来たと話した。

飢えの悪循環

＊

診断はアメーバ赤痢とそれに伴う貧血、

低タンパク血症である。おそらく不適なORS療法もむくみに拍車をかけたと思われる。しかし、これは決して特殊な疾患の例ではなく、広く第三世界そして難民キャンプに共通の、死にゆく子供たちの典型例である。食糧事情の悪さからくる慢性栄養失調は、容易に赤痢、はしかなどの小児の感染症をひきおこし、死に直結する。母親もまた低栄養状態で、十分な母乳は期待で



アコラハタク難民キャンプで診療活動する石松医師

きず、多産多死が恒常化する。五歳まで生きると子供は、五人のうちおそらく三人程度である。飢えの悪循環である。次の日の早朝、その子供は手当てのいかにも静かに息をひきとつた。遠いキャンプに車で送っていく。彼女のキャンプの近くまで来ると、ここから先は歩いていくという。家までかなりの距離があるらしいのに。「なぜだ」と問うと、「夫が怒って何をするかわからない。外国人にとつても危ないところだ。」そう言うと、朝もやの荒涼とした大地を静かに去っていった。イスラム

世界に特有のブルカという、体をすっぽりと隠す衣の、目の部分にある網目の奥の母親の目はうつろだが、ぼろにくるまって冷たくなりつつある子供を抱く細い手には、力がこもっていた。

差別される女性

＊

病気や戦争ばかりではなく、イスラム世界の女性差別が、彼女たちを重く苦しめている。困難な状況にある難民の中でも、女性、子供は、さらなる苦痛にさらされているのだ。私たちJAMSでは、昨年から、早期発見のため難民キャンプに出かけていく移動診療を開始した。しかし、医療チームで働けるアフガン人女性は少なく、女性患者のための日本人看護婦が強く求められている。

アフガニスタン問題は決して終わってはいない。今、やつと復興に向けての長い長い道のりが始まったばかりである。アフガニ人の主体的参加なしには復興はありえない。そのための人づくりこそ最も重要なことであると信じている。彼らとともに働く多くの人の参加をよびかけたい。

中村先生の「気の長い」構想を こちらに来てやつと理解

ペシャワール会事務局 沢田 裕子

昨年十一月下旬、事務系スタッフボラン
ティアとしてペシャワールに出発した、沢
田裕子さんから、元気な便りが届きました。
彼女の目に映った「ペシャワール」をご紹
介します。

* * *

皆様、お元気ですか。私はこちらに来て
から早いもので三カ月が過ぎました。お陰
様で毎日元気にJAMSで働いています。
今日は、ちょっと、私の見たペシャワール
の街の様子など書いてみたいと思います。

車と埃の街ペシャワール

ペシャワールに着いて先ず思うのは街の
埃っぽさです。乾燥した空気に車の排気ガ
スが拍車をかけ、日によっては街全体が霞
んだようになることもあり、道行く人皆が

身に着けているチャドルは、寒さよけ、女
性にいたっては顔隠しといった用途よりも
埃よけのためではないかと思う程です。中
村先生が「自分が来てから十倍位になった
んじゃないか」と言われる程、車の量は多
く、朝のみならず昼間の交通量もなかなか
のもので、時折、交通渋滞問題が新聞に取
り上げられたりしています。普通乗用車、
トラック、バスに加えリキシャ（オート三
輪にカバーをかけ、後ろに座席を付けた、
いわゆるミニタクシー。ドライバー各々が
工夫をこらし、車体に色々な飾りをつけた
りして、ペシャワール独特のトラック同様、
とっても派手にしたものの。小回りが効くの
で、運転手によっては、ジェットコースタ
ー並みのスリルを味わえる）、タンガ（馬車）、
荷車、羊の群れ、と速度の全く異なる乗り
物が、ほとんど信号のない道に混沌と鼻を

つきあわせて先を急ぎ合っています。

けれども、全く無法状態かというところ
でもなく、時に警官が交通整理をしていま
すし、速度の遅い車両は道の外側によけ、
内側が追い越し車線というルールは自ずと
守られています（ちなみにパキスタンは左
側通行）。前を走る車が右のウインカーを点
滅しはじめたら、それは、「右折」のサイン
ではなく、「私はよけますから、あなたはど
うぞ追い越して下さい」ということなので
す。タンガ、リキシャ、荷車などウインカ
ーのないものは、御者か或は荷台にのって
いる誰かが「行け行け」と手で合図してく
れます。

そういうペシャワールの道路を車で行く
時の楽しみは、珍しく雨が降った後や風の
ある日などには遠くに見えるカイバル峠を、
そうでない時は道の両脇に並ぶ店々、そこ
に見える人々の暮らしを窓越しに眺めるこ
とです。果物屋、野菜屋、肉屋、カバブ屋、
チャイ（茶）屋、ナン（パン）屋、煮豆屋、
とうきび屋（と、食べ物屋ばかりが先に目
につきますが）、お祝いの時に首から吊す、
これまた派手な飾りものを作って売る店、
車の部品屋、シャルワールカミズ（服）屋、



ペシャワールの野菜屋さん

家具屋、真ちゅう細工屋、etcと、ありとあらゆる店が間口一間の軒を連ねています。店の主たちは、日本のお店屋さんのように「らっしゃい、らっしゃい」と声をかけるでもなく、ゆったり、というか、どてーっというか、座り込んで「来る者は拒まず」の悠然とした態度です。店先に椅子や縄編みベッドをだしてチャイを飲みながら三々五々話に興じている風景も、すっかり目になじんでしまいました。また、子供が油で真っ黒になって車の部品屋で働いていた、チャイの出前をしている姿もよく見かけます。こうやって昼間働いている子供たちはおそらく学校

には行っていないのでしょうか。

店先に並ぶ野菜、果物は元氣そのもの。人参、大根、タマネギ、トマトなど、見ても粗野で、当然パックになんて入っていませんが、味は本当に素材そのものの味がします。ちよっと可哀相ですが、足を縛られ籠に入れて道端で売られている鶏なども、身こそ日本のものに比べて少ないけれど、本当の鶏の味がする。枝や葉っぱの混じった干しブドウ、あんずなどのドライフルーツ、ナッツ類も豊富に見受け、味も素朴でおいしい。余計な手の加えられていないものを味わえる嬉しさを発見しています。

女性別室に

さて、そんな楽しいペシャワールの町並みに私も溶け込んでそぞろ歩きなどしてみたい、と思うのですが、ここはイスラム圏、そして私は女。しかも外国人ですから、どうしても目立ってしまうのです。たとえチャドルで顔を隠そうが、恐らくブルカ（目のところだけ網目になっていて、頭からスッポリ被る女性用の衣服）を被ろうが、たちどころに好奇の眼で刺すようにみつめら

れ、中には立ち止まって頭の先からつま先までしげしげと見る人もあって、とてもそぞろ歩きどころではなくなってしまうのです。それでもバザールによつては、それほどでもなかったり、女性客が多い所もあって、そういう所を歩くのはやはり楽しいものです……。

それでは、外国人に限らず女性が外で食事をする時は、というと、二階か一階の奥にカーテン付きのファミリールームといわれる女性同伴客用の部屋がある店に行きますが、大体そういう部屋がある店は中級以上の店で、比較的裕福な家庭の婦人だけが外食を楽しんでいるようです。また、田舎に行つて村の小さなチャイハナで食事をする様な時は女性は車の中で食事を済ませます。お店の人が何もかも車まで運んでくれるのです。外国人であればルール違反も許されるのかも知れませんが、あの男だらけのところにはズカズカと入つて行き、強烈な視線を浴びながら食べるよりも、車の中で外の風景を楽しみながらの方がナンやカバの味も一段と良いのではなからうかと、今のところ考えていますから……。

難民産業といわれるもの

JAMSのあるユニバーシティ・タウンに話を移しましょう。ここはミツシヨンホスピタルのあるオールドバザールあたりに比べ、新しく出来たいわゆる「高級住宅地」で、中村先生の言葉を借りれば「オールドバザールが下町ならここは山の手の住宅地」ということになります。そして、その一帯にアフガン難民関係のオフィス、ユニセフを始め、各国NGOが多数集まっています。地雷解除活動、病院、診療所、アフガンクラフト(手芸品)ワークショップ、クロスボーダー活動(食糧配給・予防接種等)など様々です。が、来てみて段々に解つて来たことは、必ずしも全ての活動が有効に機能している訳ではないということ。アフガン(政情・部族問題・人間関係のあり方など全て含めて)というものの難しさ自体もあります。外国人(或いは外国)主体の援助のあり方、莫大な援助による感覚のマヒ、援助というよりも、「自己満足」のためとしか言いようのないような、現地を無視したやり方、また、皮肉をこめて呼ばれる

「難民産業」に集まって私利のみを追う人々の存在など、残念ながら「国際援助」という美しい響きを持つ言葉の裏にはまだまだ越えるべき問題が山積しているようです。幸い、JAMSは予算規模も小さく、それ故にそのような弊害にも陥らず、アフガン人スタッフを中心に、純粹に医療サイドからの協力的にとどまることのできているようです。

そして、ミツシヨン病院を含めて、派手なことは避け、あくまでも現地に即したやり方で長く継続して伝えられるものだけを残していこうという、中村先生の「気の長い」構想も、こちらに来てやつと理解できた様な気がします。「もう、俺、他に何も無いよ」と、ボソリと言われた言葉の中に、ふとした縁でペシャワールと結ばれて、今までを、そして、これからもこの地に自分の時間を注いで行くというサツパリした覚悟を感じ、まだまだ人生に迷い多き私は、羨しささえ感じるのです。

* * *

ペシャワールは日に日に暖かくなり、郊外に出ると、あちこちの田んぼで菜の花が黄色の絨毯を敷き詰めています。週末には、冬に別れを告げ、春を迎える行事、ラホー

ルの「タコあげ大会」の記事が新聞を賑わせていました。ペシャワールでも、河原の土手や空き地などで、大人も子供も混じつて一心にタコをあげている風景によく出会います。

まだまだ書きたいことはありますが、今日はこのへんで。皆様もお元気で。バマネホダ。



美術館の前で石松さんと共に

●ペシャワールを訪ねて

梶原泰治

現地の実情に合わせて

支援していくことの大切さ実感

ペシャワール会財政担当の梶原さんは、現地の状況を自分の目で把握すべく、正月休暇中にペシャワールを訪問しました。同行の友人馬場さんが撮ったセミプロ級の写真の数々は、二月の石松医師報告会で、現地の様子を生々しく伝えてくれました。重い医療機器を携えての旅、お疲れさま!!

チャイハナの梅檀と
星たちに迎えられる

元日の夜、イスラマバード空港に到着し、玄関で待つことしばし、ドクター・シャワリと沢田さんが迎えに来てくれた。ラウルピンディーからペシャワールへの道すがら、チャイでもと立ち寄ったチャイハナの庭でまず目にしたのは梅檀せんだんの実であった。

それにしても何と星の数の多いことか。

ペシャワールの朝、アザーンの声に起こ

されて街へ出る。英国統治時代の名残り色濃いキャントンメントの辺りは、緑深い街並にタンガ(馬車)の蹄の音が響きわたる。朝早くから頑張っているオートリキシャの脇を野菜を満載した牛車がゆつくりと市中心部のバザールへ向かう。ガンダラ平野を背景として商業と運送業が支えるこの街の一日が始まる。

オールドバザールの賑わいは、ウキウキする」という言葉さながらで、帽子、鍋、本、茶、ガムベルト、野菜、香辛料、入れ歯、布、衣料、ジュータンなどなど各々の区割があり、間にチャイと両替の店が点在する。路上にはナッツ類、果物、カルダモンといった露店があり、馬車が横付けにされ、人波を縫ってリキシャやタンガ、車、満艦飾のバスが行き交う。

何より欲しいのは
衛生管理のできる人材

オールドバザールに宿をとった同行のオババ(馬場さん)と私は、歩いてミツション病院を訪ねた。中村医師の回診にお伴させてもらう。

らい病棟には二十五人の入院の人々がいたが、その脇には新しい病棟が建築中であり、この秋オープン予定である。中には手術室やワークショップが広くとられ、新たならい診療のセンターになるようだ。

午前中は主に回診、その後外来を診ているとのこと。中村医師によると、通常は五十名を超える入院を数え、回診はまさに競争である由。この日もレプロシテクニシヤン(らい治療スタッフ)との回診が始まる。

打ち合せから始まる中村医師の仕事は、単に治療にとどまらず、スタッフの育成も極めて重要であり、この時期日本から来ペ中の医療団のドクターとも相談しながら、傷の洗ひ方、包帯の付け替えなど自ら示しながらの診療である。傷についても、見るだけでなく、臭いを嗅ぐ、触感によるなど

細かい。スタッフと一緒にやってみて納得させるといった方式であり、これがこちら流である。ベッドに身を起こした老人が、立って診療を見る私に、自分のベッドに腰を下ろすようすすめてくれた。

らい病棟の状況としては、薬剤等の不足もあるが、何よりも必要とするのは衛生管理のできる人材であり、できれば日本から来てくれればとのこと。

病棟の衛生管理態勢ができれば、中村医師としては、より広範な診療ができることであるが、何せ今は孤軍奮闘の観である。

無口なDr.石松が JAMSの病棟では

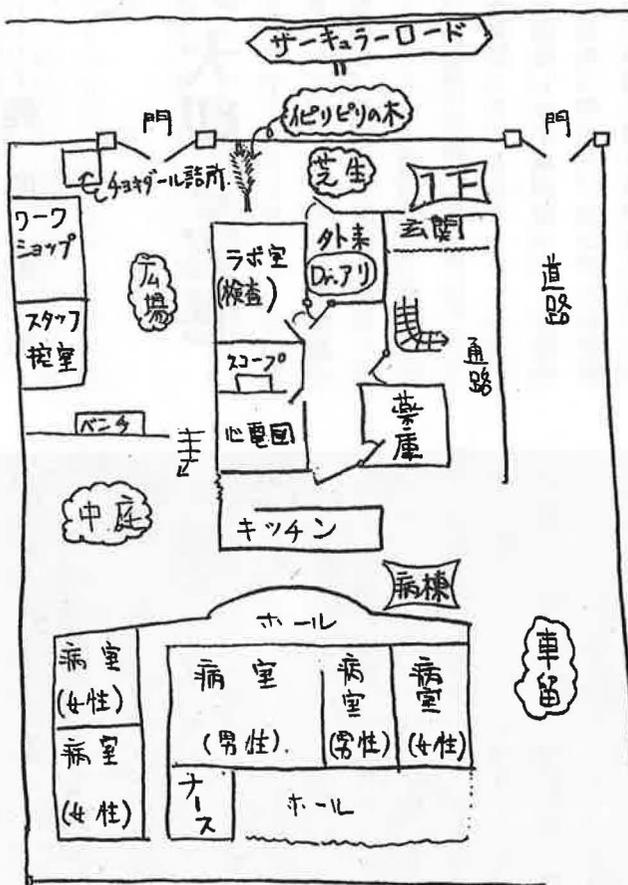
ミッシヨン病院から、リキシャで二十分程とせばユニバシティータウンに着く。

JAMSはこの街の一角にある。沢田さんに案内してもらう。

沢田さんは、こちらに来てひと月余り、生活にも慣れて、生き生きと仕事をしているようだ。生活習慣の違いから気を使うことも多いらしい。

ドクター・シャワリと石松医師は診療に

JAMS



※ ヒリヒリの木
乾燥に強く、成長が速い豆科の植物(木の一種)
"魔法の木"とも呼ばれる
JAMSの人々が大切にしている

忙しい様子である。

JAMSは、病棟もでき、スタッフも二十名程となり、一応はそろって来ており、「これから頑張るぞ」との雰囲気である。

「やあ」と言つて顔を出した石松医師が回診に向かう。この時は二十五人の入院があり、マラリア、赤痢、その他の感染症、地雷で負傷した人などさまざま。衛生士（看護師）一人を付けて、英語、ペルシャ語を交えての診療が続く。普段は無口な石松医師が、病棟では熱心に患者さんとやりとり



ペシャワールでの足はリキシャ（梶原さんとドライバー）

をしている。

ここでも、衛生管理の人があと少し欲しいとのこと。

ユニバシティータウンは、各国のNGO団体がアフガン難民援助で百団体程来ているが、その中でJAMSの予算規模は、下から二番目とのこと。最近高くなっている家賃や、インフレ気味の物価等々、やりくりも大変との感じである。

砂礫の原の難民キャンプ

木曜日は、難民キャンプの巡回日である。アコラ・ハタク・キャンプへ。日本からの四輪駆動車が威力を発揮する。カーブル川沿いのユーカリの並木道はずれ、砂礫の原を進むと、土の家、国連からのテントが現れる。その数、十万世帯、約五十万人と聞く。

現在も膨張を続けており、今日の目的地は、ここ四〜五カ月間にジャララバードから来た人々のキャンプである。視線が鋭い。あたりは、石ころだらけの荒涼とした砂漠様の土地が彼方まで続く。そこに延々と続くキャンプ。息を飲む光景である。

中村医師が背後の山並を見返しながらポツリ「阿蘇山みたいでしょうが。ただ、色は同じでもこっちは砂礫の色だけだね。」車を見つけて子供達が集まって来る。子供達は明るく遊び回っているように見え、どこかホッとす。

JAMSスタッフによる診療開始、子供、老人、女性とグループごとに待つ。あらゆる病気の人がいる。日本では考えられない程進んだ症状がある。戦争で変形した足の老人がいる。夫が家から出ることを許さないため、病状が進行している婦人がいる。幼い妹を背負った身寄のない少年がいる。いつもは、冗談の絶えないドクター・シャワリの顔がちよつと厳しくなった。

アフガニスタンからの難民は、ソ連軍撤退後も増え続けている。

今回の訪問で、今後の支援について感じたことは、ペシャワールにはその地に合った医療や人材育成の方法があり、現地の実状にあわせて対応していくことがやはり大切であるということである。

「地道に、楽しみながら、続けていく」姿勢を持ち続けたい。

●ミツシヨン・ホスピタル癩病棟の思い出……蔵所 麻里子

患者さんと患者さんの助け合う姿に 「日本流」とのギャップを

「この目で中村先生の活動を見てみたい」との思いを胸に、八尾徳洲会病院の作業療法士、蔵所麻里子さんは、昨年十一月末にペシャワールへと旅立ちました。現地のスタッフや患者さんと楽しい三週間を過ごして、無事帰国しましたので、その思い出を編集部に寄せてもらいました。

「じゃあ先生は、日本の患者を見捨てて行くねんな」、「ごめんなさい」。患者さんとのつらい会話を背に日本を発つたわりには、ペシャワールでの毎日は、申し訳ない程、のんびりしたものでした。

*通じない「日本流」

ほとんどもをミツシヨン・ホスピタルの癩病棟で過ごしました。英語さえ話せない私が、何とか居場所を見つけられたのは、中

村先生やスタッフによるところが大きいのですが、何といつても平気でウルドゥ語やペルシャ語でかまってくれる、人なつこい患者さんたちのおかげでした。仕事の手伝いをするといつても傷の処置をする時に足や手を支える程度、むしろ、まめまめしく動く元気な患者さん達の方が、役立っているのです。こんなんでいいのかなあと思いつながりも楽しい毎日でした。

出かける前に、大きな口をたたいた原稿を書きましたが、当初は、作業療法士としてという頭でいっばいでしたので、非常に日本とのギャップを感じました。日本では考えられない程、変形した手でスプーンを握り、あみ物をし、車椅子などなくても、患者さんが患者さんをおぶつて連れて来て、上手に松葉杖で屋外を歩き、日本での日常生活動作訓練の必要性を感じないのです。

こうしたらいいんじゃないかと思っても、これは日本流で考えてるんじゃないか、本当にそれが必要なんだろうかと思ひ、それに答を出す程、ペシャワールでの人々の生の生活というものを私が知らないために、たった三週間の滞在ではお手あげでした。

*患者さんにウルドゥ語習う

午後はいつもアフガニスタン人の少年と、パキスタン人の女性患者さんが、相手をしてくれて、ウルドゥ語を習ったり、折紙をしたりしました。私が何度も「○○、キャー、ヘイ? (○○って何ですか?)」とたずねたり、ウルドゥ語会話集をめくりながら、「えーつ」と言葉を捜すので、「エーット」と真似されながら、いつも笑われていました。出来の悪い生徒にさじを投げず、会話集と、折紙に使うのにもらった古いカルテ用紙を片手に病室を訪ねると、ベッドをきれいにして席をつくってくれたのでした。

スタッフは、とても気軽に家へ招待してくれました。家族に紹介され、TVでクリケットを観ながら、ナンとチャイを食べて、「中村先生は、ホントよく物を忘れるんだ



ミッション・ホスピタルにて(中村先生を真中に、左が蔵所さん、右が沢田さん)

よ」とか、「日本は野球の方が盛んですよ」とか、日本では恥ずかしくて話せないような英語で、話をしました。ギプスを巻いたり、外来の女性患者さんの評価をしたり、何かあるごとに呼んでくれ、癩の症状や処置、今後の治療方針等について説明もしてくれました。本当に、私がお世話になりました。行ったようなものです。

*不安そうな女性患者

外来の女性患者さんは、不安そうに見えました。レントゲンをとりに行くのに、ついて行きましたが、ベールを脱ぐのさえ嫌がり、私が一緒に居るだけでも、心強いかなと思えました。目が合うと皆笑顔を見せ、私の質問に全て首をかしげながらも、ニコニコしてくれるのです。「困っていることや、つらいことを少しでも聞けたらなあ、日本でできるように、何か助けになればたらなあ」と患者さんを目の前に、いつも思わずにはいられませんでした。

*小さなオペ室(手術室)のできあがり

オペは、JAMSのオペ室でしていたのですが、予定の患者さんを連れて行っても長時間待たねばならず、1日がかりなので、診察室を別室に移し、あとにオペ室を用意することになりました。さあ、今日は、大そうじだぞ。患者さんもかりだしての大仕事です。机や棚を運び出し、水を流してほうきではいて、しまつてあつたオペ台やライトを皆で運びます。私は力もないのに片棒をかつごうとしては笑われ、「シスターは、はい、これ」と、小さい箱を手渡されては

大笑いされます。決して整ったきれいな部屋ではないけれど、小さなオペ室のできあがりです。何か、運動会で総合優勝した気分にはひたる私でした。

*「もう会えないよ」

「明日で終りなの、今日までどうもありがとう」うまく伝えたいのに、なかなか会話集に言葉が見つかりません。この日を思うと涙がでる程、帰りたくない気持ちと、夢の中に現れる日本の患者さんに対する気持ちで、胃が痛みました。「来年、又会いましょうね」とやつと言うと、いとも簡単に「もう会えないよ」と言われてしまいました。「春にはお母さんとお兄さんとアファニスタンに帰るから。」

もうすぐクリスマス、最後の日に、飾りつけを一緒に作つてお母さんのベッドに飾りました。これからののに、という気持ちでいっぱいでした。



ボランティア募集への 反響ぞくぞく!!

ペシャワール会事務局

今回の石松先生の一時帰国は、新聞報道、テレビの取材を中心として、全国的に紹介され、多くの方から手紙や電話をいただきました。もちろん、激励の手紙が多かったです。ですが、多数の寄附、カンパも寄せられました。中には匿名のもありました。差出人の住所、氏名がわかりませんので、この紙面を借りて御礼申し上げます。また、今回の石松先生の帰国目的のひとつであった現地での医療ボランティアの募集については、医学生、医師、看護婦と20名を越える方からお問い合わせをいただきました。改めて本当に多くの方が、海外の困難に直面した地域での医療援助に、強い関心をお持ちであることを感じました。

ただし、現地ペシャワールは、会報等でわかりかとも思いますが暑さが、厳しく、宗教的な慣習からくる制約が多く、特に女性の行動については極端に制限されます。また、私どもペシャワール会は、資金的に苦しいため、渡航の往復の交通費と現地での生活費の月額約1万円ほどしか負担することができません。さらにアフガン内戦による社会的混乱も続いており、かなり厳しい状況の中のボランティアです。「虫のいい」とも言える協力を依頼していることは承知しておりますが、状況的に是非とも、ご協力をお願い致します。

さいわい今回は新聞報道を機に、多くの方から現地ボランティアの問い合わせがありましたので、理解いただきやすいように次のように整理致しました。

〔募集内容〕

- ・医療技術者
 - (1) 看護婦
 - らい病棟で働いていただけの方。
 - (2) 医師
 - JAMS (日本アフガン医療サービス) で、難民の診療に携われる方。
 - (3) その他、医療関係者
 - 以上(1)(2)(3)、いずれも基礎的な英会話のできる方。

・事務・経理アドバイザー

英語または現地語の堪能な方で、事務

処理能力のある方。

- ◎期間 6カ月以上滞在できる方。
- ◎年齢 25歳以上の方が望ましい。
- 〔派遣決定までの経緯〕

- (1) 問い合わせ

ペシャワール会事務局

担当 辻 睦雄

勤務先 福岡国際交流協会

電話 092-733-2220

- (2) 事務局からの資料送付
- (3) スタディツアー参加または個人旅行による現地訪問、活動の確認
- (4) 中村哲、石松義弘医師との協議
- (5) 決定

なお、現地訪問のスタディツアーを予定しております。参加希望の方は、手紙に希望の時期、可能な日数、電話番号などを記入の上ペシャワール会事務局の辻まで郵送ください。また、個人的にJAMSを訪問される場合は、現地のオフィスが多忙なため、ご自身で行動のできる方に限らせていただきます。その場合にもご連絡をお願い致します。

*

*

●全国各地の方々からのお手紙

真情あふれる熱いメッセージ

◆ぜひ難民キャンプで

一月二十九日付の京都新聞を拝見し、お手紙を書きました。私は京都第一日赤の看護婦をしています。看護学校の頃より、医療の手の足りない国へのボランティア活動することを、目標にしていま

した。JAMSについては全く知りませんでした。活動に参加したいと思ひますので、活動に関する資料を送付していただきしたいと思います。

是非、難民キャンプでのボランティア活動をしたいと思ひますので、お願いします。(京都市 S・M女)

◆検査技師です

謹啓 一月三十日の岐阜新聞で貴会の事を知りました。私は、現在岐阜市内の病院で、臨床検査技師として勤務しております。貴会の事をくわしく知りたいと思ひますので、資料等がありましたら下記まで御郵送下さい。(岐阜県 M・K男)

◆年のいった医学生ですが

「共に歩む」ボランティア急募のチラシを、SHAREの通信の中から見つけ読みました。

小生は年のいった医学生ですが、発展途上国での医療に興味を持っている者で

す。二年前に中部インドの田舎に約三週間滞在した経験を持ち、英語もひと通り話せます。

募集対象に、学生の短期見学も拒まない、とあります。小生は実践的には何もできないでしょうが、上のことばに期待をかけて、夏休みの一カ月位をそちらで「働きたい」(実は足手まといになるかもしれませんが)と考えております。

海外(途上国ばかりです)での一人旅は慣れていますし、どこでも寝れて、食べ物さえあれば生きていけます。日雇い労働者の集まる寄せ場での、東洋医学流の治療も手伝ったことがあります。

以上のような希望を持った者ですので、もしよろしければ、より詳しい情報、ビザや身分のことなど、教えて下さい。(新潟市 T・J男)

◆自分のこの目で

はじめまして、1月29日京都新聞夕刊を拝読させていただき、ボランティアに是非参加させていただきたいと思ひペンをとりました。参加させていただくためには、看護婦の資格、年齢制限他があると思うのですが、是非それをお聞きしたいのです。

私は18歳の勤労学生です(高校生)。高校生では無理だとおっしゃるのは当然だと思ひます。でも私であれば、現地に

行って何かのお役に立てればと思ひます。現地に行く事は無理だとしても、日本で少しでも何かできることがあれば、教えていただきたいと思ひます。

ボランティアに参加させていただきたいと思つた理由は、若いうちに何か困っている人の役に立つことができ、自分の人生の中で少しでもよい経験ができればと思つたからです。そして、自分のこの目で他国の現状を確かめてみたいと思ひます。

どうぞ御返事よろしくお願ひいたします。(京都市 M・E女)

◆感受性と情熱だけがとりえの..

一月も終わろうとしている今、二月こそは逃げられまいと思つている高校二年生の今日この頃です。

ところで先日、京都新聞でペシャワール会の活動についての記事を読んで、ボランティアに参加したいと思つたのですが、私はもうすぐ花の高三になり、現地に行つて参加するのは、今のところは不可能なのです。じゃあなんで手紙なんか書いてるんやな」と思われるかもしれませんが、私は今自分で出来る事があつたらお手伝いしたいのです。ボランティアの経験なんて、少しもない私なのですが、なぜこんな事を思つたかと申しますと、



患者の話の聴く石松医師



募 集

JAMS 発

「共に歩む」ボランティアを!!

JAMS では日本からのボランティアを募集しております。ただし、JAMS は出来上がった団体ではなく、熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ボランティアを歓迎します。

短期長期を問わず受け入れます。送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、ボランティアたちは短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地ではかこれらの方々の便宜を図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象:

1. 医療技術者（医師、看護婦（士）、検査技師、理学療法士など）。又は事務関係者で外国語（英語又は現地語）の堪能な者。
2. 以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、簡単な日常英会話ができる者。
- ② 6カ月以上の滞在者は、現地で1カ月、ペルシャ語またはパシュトゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をしていただきます。
- ③ 派遣団体などからのサポートのない場合、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費の一部を負担します。旅行傷害保険は自前です。ボランティアとして報酬は期待できません。
- ④ 学生などの短期見学も拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。
- ⑤ 現地のビザや身分は、現地パキスタンの行政機関と協力して保証し、最大限の安全も図ります。

詳しくはペシャワール事務局に直接お問い合わせ下さい。

Japan-Afghan Medical Service

サンダル・ワークショップも再開
(P8参照)



だいたい私は、中央アジアや西アジアにとても興味をもっているのです。大学に無事入れたらペルシャ語などを勉強した

いと思っています（法学部志望ですが）。それから、イスラム圏にも関心があり、将来は一人でイスラム圏を見聞して回りたい、などと豪快な事を思っています。（それを思うと、男に生まれればよかったのになあ、と思ったりもしますが。）とにかく、身動きが不自由なのは、高校生の性なのでどうしようもありません。「今日も勉強が出来ひんかった」が毎日でもお手伝い出来れば幸いです。日本にいてボランティア気分にいるより、現地に行つて、実際に自分で、苦労は多いと思うのですが、見て、感じて、行動したいのはやまやまですが、と書くとき青い奴のたわごとと思われるでしょうか。感受

性と情熱だけがとりえのパープーで青い私なので、あまりお役に立てるとは到底思えません。一文さし上げた次第です。
(長岡京市 H・K女)

■ドクターシャワリとの出会から
前略、先日は大量のペシャワール会報をお送りいただきまして有難うございます。会の活動の模様がよく分かりました。早速入会させていただきます。
ペシャワール会の存在は、昨年ペシャワールから送られてきたJAMS発足の知らせや、年報の中に名前があつたので知ってはいました。しかし、肝腎の連絡先が2月7日付朝日新聞でDr・石松の記事が紹介されるまで分からなかつた

め、だいぶ日数がたつてしまいました。
1988年6月、日本での研修を終え帰国途中のDr・シャワリとたまたま同じ飛行機にのりあわせなかつたら、私がペシャワールやアフガン難民に関心を持つことはなかつたことでしょう。アフガニスタンについては、内戦が長く続いている国であることしか知りませんでした。一度行ってみたいと思っているパーミアンが、アフガニスタンにあるのを知つたのもつい最近のことです。Dr・シャワリは手紙の中で、一度ペシャワールに来て、自分の目でソ連軍がアフガニスタン人民にどんなことをしてきたかよくみて欲しいといっています。
これまで呑気な旅行者として、いくつ

ミッシェン・ホスピタルで患者さんを診る
中村医師



かの国を訪れたことはありませんが、これ
といてボランティアとして手助けでき
るような能力を持たぬ私が、10日や2週
間(とれる休暇日数はこの程度です)出
掛けて何かできるか、いや、何もできな
いと考えると、ちょっと気軽にいくこと
がはばかられますし、熱心なペシャワ
ール会員のお叱りをうけそうです。
「というようなわけで、自分に出来るこ
とは、ペシャワール会の一員として、さ
さやかにお手伝いすることだということ
がよく分かりました。」

(横浜市 K・M女)

父の魂はパキスタンに

二月七日「朝日新聞」で「難民医療に
支援を」の記事を読みました。少しです
が同封の五万円役立てて下さい。

私の父は一九八五年にパキスタンを旅
行中、バスの事故で亡くなりました。そ
れ迄未知の国であったパキスタンは、私
にとつて急に身近になり、父の事故現場
へ何としても行きたいと、パートの仕事
も始めました。念願叶って、昨年父が果
すことの出来なかつたシルクロードの旅
を中国のウイグル自治区からクンジュラ
ーブ峠を越えカラコルムハイウェイをラ
ウルピンディ迄全行程十八日間の旅をす
る事が出来ました。事故のあつたギルギ
ット近くの現場にも母と一緒に(母はそ
の一年前にも行きました)おまいりする
事も出来ました。そしてパキスタンは、
父が生きていたら必ず再訪したのであらう
と確信出来るくらい私の心をとらえまし
た。私が男なら、いいえもつと若い独身
の女性だったら、何かパキスタンの役に
立つ事をしたいのにといつも思っていま
す。パキスタンの人々の為に働いている
日本人の記事をみる度に、何も出来ない
自分が情けなく思われます。そして今回
「放置されている女性と子供を救おう」
と言うキャンペーンと先生が山鹿出身と
言う事に、即、私の気持ち動きました。

言う事に、即、私の気持ち動きました。

女性と子供達の為に飛んで行つてお手伝
いしたいのですが、主婦として子育て中
の身としては、自分の勝手を通す訳には
いきません。日本人はお金だけだして人
材の協力がないと良く言われていて心苦
しいのですが、これからパキスタンには
何回でも行きたいと思つて働いて得たお
金です。今は資金の援助でしかお手伝い
が出来ませんが、又、いつか何かのお役
に立てるかも知れません。とりあえず働
き乍ら英語の勉強を必死でやつてるん
ですが、自分にもオバさんなので遅々とし
て進みませんが……。

私は福岡県大牟田市で高校迄過しまし
た。山鹿には温泉もありますし、キャン
プに行つた事もあります。そのゆかりの
方が頑張つていらつしやるんですから応
援しない訳にはゆきません。私には父の
魂は今でも自由にパキスタンを旅してい
るように思われるのです。パキスタンへ
行けば父に逢えるような……そんな気が
します。どうぞお体に気をつけて、ご苦
労が多いと思いますが先生の情熱をもや
して頑張つて下さい。

(横浜市 K・N女)

仕事から何かお手伝いできれば

石松医師の記事を読んでお便りする次
第です。小生、京大の学術調査隊の一員
として、ガンダーラ仏教遺跡の発掘調査

で毎年パキスタンを訪ねております。中
村先生には一九八四年にチフスにかかっ
たおりに助けていただいた縁で、お付合
させていただいております。また安部ナ
ースにもペシャワールでお会いできまし
た。また彼女から、貴会の活動について
うかがつておりました。仕事から何かお
手伝いができることがあればとつねづね
かんがえておつた次第です。ペシャワ
ール会」について何か資料でも送つていた
だければ幸いです。お手数ですがよろし
くおねがいます。

(京都市 M・M男)

●いしまつ よしひろ

- 1959年 熊本県生まれ。
- 1978年 済々黌高校卒業。
在学中、山岳部で九州や信州の山を登る。
- 1987年 大分医科大学卒業。
- ～89年 天心堂へつぎ病院にて外科、内科の研修。
- 1989年4月 パキスタンのペシャワールへ出発。

●熊本・福岡の石松医師現地報告会アンケート

石松医師の報告に熱い共感

* 会員の方以外は匿名で掲載させていただきました

るのですね。

(下益城郡松橋町 N・M女)

* すばらしい本当の国際協力の姿を見る事が、聞く事が出来ました。人は皆、奉仕の心と善意をもっています。それを生かすも殺すも社会環境です。信念と夢をもつて前に進みましょう。

(熊本市 T・M男)

◆想像以上、大変なショック
* 会報などで現地の様子はある程度知っているつもりでしたが、直接お話を聞きますと想像以上のものでした。貧困とか宗教上の問題とか多くの障害があるでしょうが、頑張ってください。

(山鹿市 森田周子)

* 日本とあまりにかけはなれた状況に驚き以上です。

(熊本市 A・S女)

* 大変なショックと日本のODAの援助のあり方、問題点を考えさせられました。

(熊本市 N・H男)

* ペシャワールやアフガン難民のことが身近に感じられました。こんな足元からの援助活動が、世界の人々の役に立つて

す。この報告会は、私自身への問題提起になったと満足しています。

(熊本市 N・S女)

* 非常に困難な状況の中で頑張っておられる先生方に強い感動をおぼえました。私達も出来る形で協力しなければなりません。

(上益城郡御船町 K・E女)

* ボランティアの本質が少しわかったような気がします。

(熊本市 S・H男)

◆「自立のため」の「人づくり」

* 石松さんの「人づくりが遠回りのようでも一番大切だ」という話がよくわかった。

(熊本市 S・H女)

* まず日本とは全く異なる土地があることを知れてよかった。日本はそろそろ他者のことも考えていかねばと思った。ライについて、少しでも知れてよかった。僕らではなく、彼らが苦しんでいるのはなぜか、今できる範囲で、少しでも力になりたい。

(熊本市 U・K男)

* 同年代の石松医師のことを新聞で読んで興味をもち、報告会に参加しました。現地の厳しい状況、人々の貧しさ、苦しさがひしひしと伝わってきました。私も微力ながら少しでも協力したいと思っています。

(熊本市 S・Y女)

* 日本人の豊かさを少しでも分けていける活動はとても素晴らしいと感じています。

(熊本市 S・Y女)

(久留米市 A・K女)

* 献身的なボランティア活動に深甚な敬意を表したい。しかし、個人の集団の力では限界がある。抜本的な救済のためには、現地の政府や国民全体がもっとしっかりしなければならぬと思う。良い指導者の出現が必要。国連等、国際的な総合的対策も必要。しかし、当面は誰かが何かをしなければならぬだろうから、ボランティアは大事なことであろう。

(熊本市 N・C男)

* 相手の自立の為の援助。相手が必要としている物、事、人を援助する。全くその通りだと感じました。

(熊本市 S・H女)



熊本は石松さんの出身地だけに高校の同級生や昔の山仲間も駆けつけた



一五〇人を越える人々の熱気
なかで開かれた大分の報告会

* 実際のお話をきけばきくほど、社会情勢とか文化、宗教、民族その他もろもろの事情の違いからでてくる解決の難しい問題が大変多いということを改めて感じました。日本からの援助が、単にお金を出したからそれでよいと思つてしまつて本当に援助をうける側の人々のことを考えてないということも、現地地のお話をきいて改めて感じました。今、自分のできることは何なのかを考えると、それをすること（大変ささやかと思いますが）を自分の問題として、心の中に持ちつづけていければなあと思ひました。

(熊本市 S・Y女)

* 「自立のための援助」という言葉が印象に残りました。(熊本市 M・D男)
* 人づくりという事で頑張つていなあと思ひました。村の青年、特に村に愛着を持つている青年達にメデイカル・トレーニングをしていくということ、これが長く続いていけば村レベルで予防医学に結びつき、現地に根ざした協力になるのだと思ひます。また、このアイデアをアフガンの現地ドクターが出されたという事に感激しました。こういう現地のスタッフがいる限り、希望があると感じました。(熊本市 U・T女)

◆フレ、フレ、石松!!

* 正直なところ集会の参加人数の多さに驚いています。今後の「支える会」の発展をお祈りします。哲ちゃんの元気な姿をスライドで見えて安心しました。

(熊本市 佐藤赫子)

* 昔「山男」の石松君が、これほど大きな男になっているなんて。志の清らかさ、高さで、人間はずばらしくなれるのだと思ひました。今日は、石松君のツメのあかをもらつて飲んで帰ろう。「フレ、フレ、石松!!」(熊本市 T・H男)
* 石松君の志の高さに感動! 彼を支えようとすると人々が多いこともうれしく思ひます。自立を促す援助、人づくりの重

要性を考えました。

(八代郡宮原町 K・S男)

* 新聞で石松さんの活躍を知り、経済費の先輩として非常に嬉しく思ひました。貴重な現地報告を聞き、石松さんの情熱と努力に感銘しました。

(熊本市 M・E女)

* 経済費の同級生の代表として頑張つて下さい。(熊本市 Y・M男)

* 石松先生の報告を聞くと、人がらでしようが、明るく話をしていても、本当は大変な事をしてるのだと思ひました。あつたかい人がらに接して、ますます、私も何かできる事があればと思つています。

(鹿児島市 S・M女)

* 石松先生のお人柄がよくわかりました。ドンドンこの様な先生がでられることを期待します。(八代市 M・S女)
* 普通の人が普通に活動されているようにみえました。押し付けでも傲慢でもない石松先生の生き方は素晴らしいと思ひます。(熊本市 U・T男)

◆私にできることは何だろう

* もしかしらたら、一生知らないですませたかも知れない第三世界の事態、ザルで水をくむような、考えただけでも気が遠くなるような活動を、淡々とさりげなく続けておられる石松先生には驚くばかり

です。英語もできず、専門的な技術もたない私にできることは何だろうと考える時、私は私のまわりで手助けを待つている人に、石松先生の言われた「自立のための手助け」を心がけていこうと思ひます。(山鹿市 原直子)

(山鹿市 原直子)

* 自分も青年海外協力隊OBで、アフリカのマラウイ共和国でレントゲン業務に従事していた関係上、非常に興味をもって話を聞かせてもらいました。アフリカでも、ライ病関係の仕事が多く、レプラ病棟は非常にペシヤールと似た状況だつたと思ひます。小生でも、何かお役に立つことがあるなら、協力させてもらいたいと思ひます。(熊本市 M・H男)

(熊本市 M・H男)

* 私がアメリカでホームステイした家のお父さんがアフガニスタン人で、沢山のアフガン人と知り合いになりました。4月から医学を勉強するつもりですのでいい勉強になりました。今やりたいことと将来やりたいことは異なると思ひますが、人の役に立つ仕事をしたいと思ひます。(熊本市 S・M女)

(熊本市 S・M女)

* 医学部の学生として大変興味深く拝聴しました。自分が医学部にはいった目的は発展途上国での医学という事でしたので、これからの方向を考える上で参考にさせて頂きます。(熊本市 S・K女)
* 何か自分にできたらいいのには思ひますが、看護婦でもなんでもないのですね。

アフガン戦争の大きな影響や宗教、もの
の考え方の違い、政治的事情……難しい
状況の中では、このような小さなことを
着実にやっていくしかないような気もす
る。だからこそ、自分にも何かできるこ
とがあつたらやりたいと思う。

(熊本市 M・Y女)



◆考えさせられました

*この会の存在を今まで知りませんでした。
た。こういう人のいることを知って、話
を聞いただけでも勉強になりました。

(北九州市 S・K男)

*友人につれられてきたのですが、実際
に行動されている方々の言葉を聞き、非
常に感銘をうけました。つづけていくの
は難しいでしょうが、がんばってほしい
と思います。

(佐賀市 U・Y男)

*先生の活動のお話を聞いて、日本でぬ
くぬくと生活している自分が恥ずかしく
思われました。

(佐賀市 M・K女)

*現地の実状を知って、大変御苦労され
ている様を知って、感動致しました。こ

の様な現実を我々は少しも知っていないこ
とを、はずかしく思います。

(宗像郡福岡町 H・T男)

*人が「生きる」こと、「生かされている」
ことというか、生命について、ちよつと
考えさせられました。本当に大変なこと
だと実感しました。

(木村千寿)

*女の状況があまりにも痛ましい。誰か
スタッフとして働きに行ってくれないか
と……

(福岡市 M・T女)

*いろいろなことを考えます。家に帰っ
てからも、きつと、たくさんのこと考え
ます。心にしみる時間でした。

(福岡市 O・Y女)

◆「普通の人」石松氏

*今年の正月にペシャワールに行つて、
ミッシヨンホスピタル、JAMSの活動
を見せてもらい、写真も撮らしてもらっ
たが、今日の説明を聞いて、写真の人物

(福岡市 B・M男)

の周辺の事情があらためてよくわかり、
理解が深まると同時に、見ていたことの
表面では知りえなかつた深刻さを痛感。
ぶつさらばうな表情、語り口ながら、傍
観者である自分には知りえなかつた石松
氏のボランティアのあり方に感銘した。

(福岡市 B・M男)

*厳しい環境の中で、大変だと思いまし
たが、負いわずにやっつてらっしゃるのを

(福岡市 B・M男)

聞き、ほつとしました。今後も頑張つて
ほしいと思います。

(匿名)

*早期治療もさることながら人づくり、
教育の大切さを痛感しました。皆様お疲
れさまです。私も細く長くお手伝いさせ
ていただきたいと思ひます。

(福岡市 H・N女)

*どんなすごい人が行っているのかと思っ
たが「普通の人」と言われ大変親近感が持
てました。(糟屋郡志免町 T・K男)

(福岡市 O・Y女)

*報告会には様々な年齢層の人々がいて、
心強く感じた。

(福岡市 O・Y女)

*若い方々が沢山、出席されていて、私
達年配も、もう少し関心を持つ様になつ
たらいいなと思ひました。普通の人々が普
通の感覚で普通の事としてたずさわると
いう石松先生のお話に感じ入りました。

(福岡市 古池節子)

◆将来は自分も

*「自立を助けるための援助」という言
葉が特に胸に残りました。現実にはとて
もむずかしい点があると思ひますが、医
療技術者でもなく、福岡を離れることも
ままならない私に何ができるか、じつと
り考えてみようと思ひます。(もちろん考
えるだけでなく行動にまで結びつけたい
と思ひます。)

(福岡市 M・Y女)

*犬養道子著の「渇く大地」をみたよう

(福岡市 M・Y女)

な気がしました。中村先生の御本も読ま
せて頂きましたが、何しろ年が年なので
(八十六歳)何のお役にたてませんの
で、出来るだけの献金をさせて頂く決心
を新たにしました。

(福岡市 T・H女)

*具体的な話で、よく分かりました。私
は五十八歳の主婦にすぎませんが、もし
若かつたら、そして何か技術があればと
もどかしく感じました。家の中にござろ
ろしている薬も多くあるし、医院に行け
ば、たくさんの薬を頂いて、残る始末。
空しく矛盾を感じました。

(福岡市 門司キヨ子)

*先生の話に非常に感銘をうけた。医学
を学ぶものとして得るものが多かつた。

(佐賀市 K・H男)

*私は医学生だが、石松先生のような医
師になれるだろうか。どうも自信が無い。
そのせいもあつて先生を尊敬してしまつ
た。

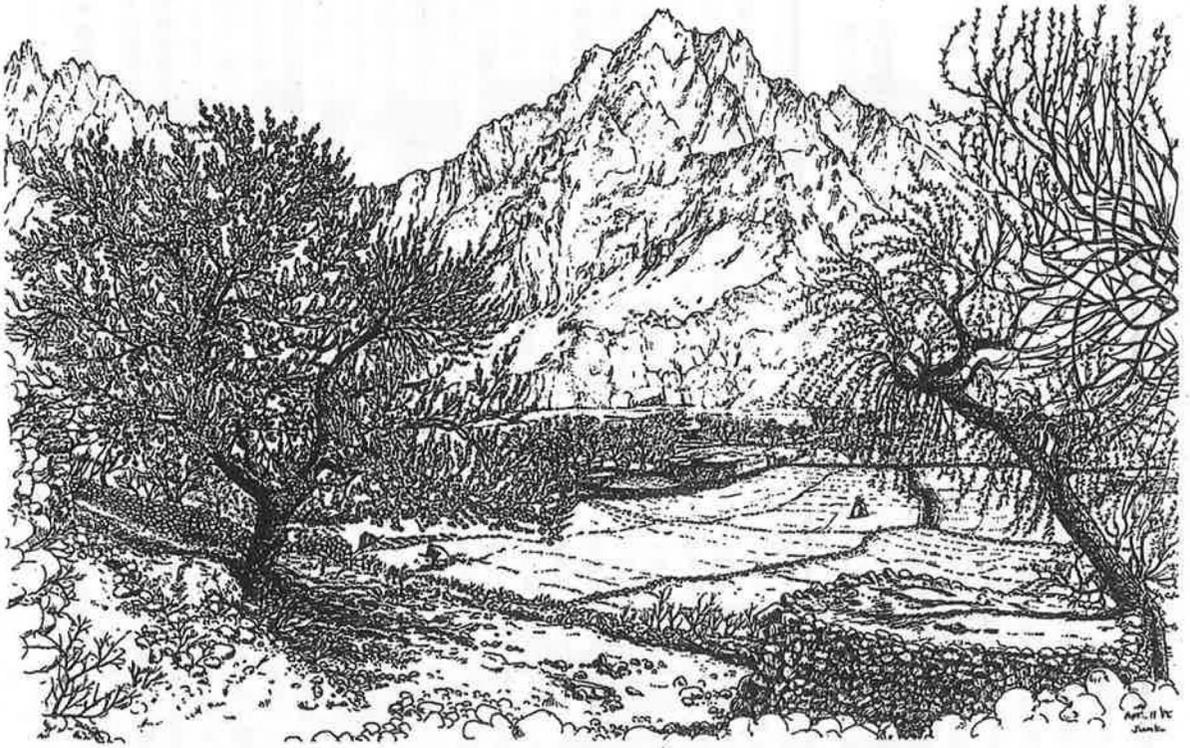
(佐賀市 S・Y女)

*将来自分も医者になって石松先生のよ
うに働きたいと思ひているので大変ため
になった。石松先生ががんばつて下さい！

(宗像郡福岡町 H・T男)

*行先がペシャワールになるかは分かり
ませんが、これから勉強して、将来は、そ
ういう場で自分を生かせたらと思ひていま
す。参考になりました。ありがとうござい
ました。

(田川郡添田町 M・M女)



ヒナール 絵・山田純子 文・山田純子／俊一

もやがかり、杏の薄いピンクの花と柳の若い緑がほ
 ーっと美しい。ゆつたりと白い霞の中に漂っているよう
 だ。

こんな日に、ヒナール(なだれ)が起きる。ドーンと空
 気をゆるがして、雪煙がゆつくり流れてくる。さらに暑
 くなつて山の氷が溶けだすと、ムース(土砂流)が、黒い
 蛇のようにうねつて村近くまでおりてくる。ときには、
 二階以上もある大岩まで押し流し、果樹園も人家も襲う
 ことがある。そしてフンザの道は、寸断されてしまう。
 子を背負った女が通つた。

「どこ行くの？」

「ダヤン(呪術師)よ。娘の膿んだ傷が、なかなか治らなく
 てね。あの医者はだめよ。以前、うちの婆さんの涙が出てと
 まらないのは、水の飲み過ぎで、それが頭にたまって目から
 出てくるって言うのよ。信用できなくなつてね」

(『ヒンディ村―最後の桃源郷フンザにくらして』石風社より)

●事務局だより

*石松先生ほんとうにご苦労さまでした。研修会、現地報告会、記者会見、テレビ出演と、とにかくハードなスケジュールでした。今回の帰国の主な目的は、岡山の療養所^{おひ}久光明園での研修にあったのですが、もうひとつ大きな目的がありました。中村先生は帰国する石松さんに、冗談っぽく「日本に帰ったら、お金かかか必ず土産を持ってこいよ」と言われたそうですが、JAMSの運営資金の募金とJAMSやミッション・ホスピタルでのボランティア募集の呼びかけがそれです。結果は、今号の誌面をお読みいただければわかるように、全国レベルでの強い反響で、かなりの額の募金が寄せられ、スタディ・ツアーには、すでに医学生や看護婦さんが出発しています。暖かいご支援深く感謝いたします。

*現地報告会は、大分・熊本・福岡の一般の方々他に、大分医大や福岡の子ども病院、大阪の八尾徳洲会などでもやり、大分医大では主催者の予想に反して七十名もの医学生があつまりました。医学生といえは福岡では佐賀医大の学生、熊本では熊大の医学部の学生の参加もあり、私たちにそれなりの希望

を持たせてくれました。中村先生の今号の文章にもありますように「(JAMSが)近い将来熱帯病の良臨床訓練・研究施設に」なり、医学生や若い医師たちが、JAMSで研修を積み、アジアの各地やアフリカ・ラテンアメリカの地に出かけてゆく日が来るのも、あながち夢物語とも言えぬような気がしてきました。夢想ついでにもうひとつ言うと、海外医療協力に関心を持つ西日本地区の医学生(医学生に限らずともよいかも知れませんが)のネット・ワークがJAMSを一つのきっかけにしてくれないものでしょうか。ペシャワール会事務局も全面協力しますので、ぜひやって欲しいですね。夢のような話ばかりですが、福岡の板付北小学校で現地報告した石松さんは、「夢は持ち続けられれば必ず実現する」と子供たちに話していました。

*夏には中村先生も一時帰国されます。講演会等ご予定のグループは事前に事務局までお知らせいただければ幸いです。

(お願い) 当分の間、郵便振替と手紙は従来通り福岡YMCA内ペシャワール会宛でお願いします。
〒810 福岡市中央区天神一丁目10-24 福岡三和ビル4F 郵便振替 福岡916559 ☎七二一七四〇

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ
中村哲著 四六判上製二〇頁 一五四五円

ペシャワールにて

— 癪^{いら}そしてアフガン難民

ペシャワールについて語ることは、人間と世界について総てを語ることであると言っても誇張ではない。貧困、富の格差、政治の不安定、宗教対立、麻薬、戦争、難民、近代化による伝統社会の破壊、およそ凡ゆる発展途上国の抱える悩みがここに集中しているからである。悩まばかりではない。我々が忘れ去った人情と、むきだしの人間と神に触れることができる。

石風社

福岡市中央区大名1-2-15
電話092(714)4838 振替福岡4-25227

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、JOCOSの「共に生きる」という理想に賛同し、中村哲医師の پاکستان北西辺境州での医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、派遣母体であるJOCOSを通して必要な協力を行うが、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑤ 会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑨ 本会の事務局をFARA HOUSE
(千八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇-二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二一-二三七二) 内におく。